

鴻 koh

月刊俳句誌

令和3年12月1日発行
(毎月1回1日発行)

第16巻第12号 通巻186号

12月号
2021



酒

撫子の紅あはあはと鳥遍路

風音が花野の音となる夕べ

一期一会かなかなの声濡れて降る

箸紙を箸置に折り十三夜

投入れし鷹の羽すすき月浴びよ

遠慮げな雨となりけり菊供養

夕ざれて葦刈りの女が火を熾す

まつさとの瀬に咲き分けの花芙蓉

蓑虫のゆらゆら川の一里塚

火袋に残る日溜り鴉鳴けり

鬼の子に一所不在の風の音

晴れきつて飛驒山中の雪迎へ

烏瓜一会の色を深めけり

一期一会

主宰作品

増成栗人

詩 作品抄

江ノ電で鎌倉に入る秋の暮 鈴木 崇

ひさかたにギターケースを開けて秋 井上つぐみ

播くは賢治の童話虫の秋 佐藤あさ子

亡き妻のはや一周忌秋なすび 伊藤啓泉

新涼やオルゴールの捻子巻いてみる 綾戸五十枝

萩すすき夕べの風と話さうか 藤原明美

烏瓜詩となる言葉探しゐる 倉林はるこ

餡練つて練つて十五夜月夜かな 畑田久美子

無雑作に卓に置きたる秋団扇 鈴木容子

三の膳零余子ふた粒添へられて 花本智美

野の色に艶深めゆく吾亦紅 生井ちよみ

蕎麦膳の出汁巻き卵江戸の秋 北城美佐

草蔭に蟬の骸を移しやる 山岸明子

オカリナの音が末枯の草原に 伊藤真代

彩の国奥も奥なる新豆腐 守屋吉郎

白菜の赤子のごとき葉を広げ 武藤敏子

パイ生地の厚み揃はず文化の日 足立技里

そそと秋そそと北上川の風 西條弘子

吾亦紅ひとりが好きといふことも 青木まゆ美

読みさしの本に葉を入れて秋 小林和子

増成栗人 選



『スマホ脳』

アンデシユ・ハンセン・著
新潮新書・刊



『スマホ脳』の著者アンデシユ・ハンセンはスウェーデン出身の精神科医で、スマホが脳に与える影響についての数多くの論文を精査して本書を著した。母国はもちろん世界中で話題となり、日本でも約一年かけてベストセラーになった。日本版の帯には「ステイプ・ジョブズはわが子になぜiPadを触らせなかったのか？」というジョッキングなコピーが付いている。つまりスマホの開発者本人が、「スマホの弊害」について自覚していたというのだ。「触らせなかった」というのは言い過ぎだが、実際、ジョブズはわが子のスマホに触る時間を制限していたらしい。では一体どんな弊害があるのだろうか。

著者は科学者らしく慎重に論考している。その前提となっているのは、人間の長い歴史の中で脳の性質はほとんど変化しておらず、外敵から身を守り、食料を確保することを第一義としてきたことだ。しかし現代になって生活様式が激変したことで、脳と社会がミスマッチを起こし

ていると指摘。ここ数十年で生活が豊かになったのに、精神の不調を訴える人が大幅に増えたことに対する危機感からこの本は始まっている。

本書でいちばん驚いたのは、二〇一一年を境に不調者が劇的に増大した事実だった。その年、それまでは高級品だったiPhoneが入手しやすくなり、アメリカの若者に一億二千万台が売れた。その後の彼らの「精神的不調」の身が興味深い。若者たちの感じているのは喪失感や絶望感ではなく、「自分は幸せではない」や「孤独を感じる」といった漠然としたものだった。それはLINEや

して、このことの重さに気付いたのだった。本書の多くのページはソーシャルメディアが人間の脳の仕組みを利用して広告ビジネスを展開していることに割かれている。「いいね」をもらうと報酬として脳内にドーパミン（快樂物質）が放出され、ずっとスマホに触っていたくなる。そこに効果的に広告を打つことで、LINEやフェイスブックは莫大な売り上げを得た。だから著者は言う。「無料で使えてラッキーと思っていたら、大間違いなのだ」。あらゆることが無料で検索できる便利さはあるものの、ソーシャルメディアは使用者の脳を研究しつくして、できる限りたくさんの広告を送り込むことを最優先させる。それゆえみんなが喜びそうな刺激的なニュースを選び出し、真偽も確かめずにフェイクニュースを拡散させることも厭わない。この無責任な所業は、最近になってようやく糾弾されるようになっていった。

僕がもつとも面白いと思ったのは「デジタル効果」の項だった。「デジタル性健忘」とも呼ばれるこの現象は、ある

データが別の場所に保存されていると脳が自分で覚えようとしないとどうもの。「必要な時にググればいいや」というヤツだ。被験者グループを美術館に連れていき、写真を撮ってもいい絵と、見るだけの絵に分けて指示し、その後、どれくらい覚えていたかを試したところ、見るだけの絵の方の記憶が明らかに勝っていたという。記憶するにはカローリーを多く使うので、脳はどこかに保存されていると分かる。積極的に記憶しようとはしない。それは少ないカローリーで生きなければならなかった太古からの習慣なのだ。

ここで思い当たる言葉があった。この連載の初期に取り上げた美学者ロラン・バルトは著書『表徴の帝国』で、「俳句は子供が『これ！』と『言って指差す動作を復元するもので、その時、心のシャッターを切るカメラからは、あらかじめフィルムが抜かれている』と述べている。旅先でやたらと写真を撮る人がいる。しかし彼らがその風景を覚えているのかは疑問だ。デジタル性健忘の写真は、ただの自己満足のデータとして倉庫にしまわれ

その倉庫の扉は一生涯開けられることはない。一方で、俳句を作ろうとして心のカメラのシャッターを切るとき、フィルムが入っていないことを知っていれば、脳は自分の記憶にしっかりと刻み込もうとする。そしてそれを俳句にすることができれば、個人的な記憶を超えて、一句として他の人と共有できる作品にさえなる。

幼児のデジタル端末使用の悪影響や、ティーンエイジャーの不眠症など、恐ろしいエピソードが満載の一冊だ。しかし最後に、至ってシンプルな解決法が提示される。それは、スマホをできるだけ遠ざけること。それほどスマホ依存は強く悪質で、一日離れただけでも絶大な効果があると説いている。

そして俳人にはそれよりもっと良い解決方法がある。渾身の一句を詠めたとき、きつと脳内にはスマホ以上にドーパミンが大量に放出される。決定的瞬間を切り取る作句の意志は強靱なものであり、デジタルには決して置き換えられない。

「乾蛙に雲の流るる速さかな 北村操」

「葱」は、百合科の多年生草本。中国西部の原産。漢民族が原始時代から栽培したという。日本料理や薬味として重要な野菜である。関東は白根を長く太く育て根深として、千住葱、深谷葱、関西は葉葱として九条葱が代表的である。葱は古名を紀きといひ、一字であることから一文字とも言う。「鴻」発行所のある松戸市は、小説「野菊の墓」の舞台となった矢切野に、古くから葱が栽培され矢切葱として知られている。

起きぬけの眼にあをあをと困ひ葱 栗人

葱

特集

俳句に詠まれた葱

荒井一代

今は十月、旅する蝶の浅葱斑が近所の庭に來ているとラインが届いた。

長く続くコロナ禍では家籠りを余儀なくされ、人に会うことも限られたりと暮らしも随分変わってしまった。しかし変わらないのは食すること。これから寒くなるにつれて、鍋料理すき焼きにと美味しく「葱」は冬の季語に登場する。

下仁田の土をこぼして葱届く 鈴木真砂女
深谷葱土も大事に売られけり 鷲尾洋子
九条葱東寺の塔の際やかに 割田容子

江戸時代中期には既に全国各地で気候風土に合った葱が栽培。関西では葉葱（青葱）を主流に、関東では主に根深葱（白葱）が栽培されていた。白葱は土寄せを繰り返す手間と愛情が丈となる。京都盆地の底冷えは伝統野菜の九条葱を守り育て、東寺の塔と共に歴史の誇りまでが伝わる。

葱ぬいて訪ひ来し婢をばもてなせり 杉田久女
献立の決まつてをらず葱を引く 村手圭子
まずは葱を抜いてくる姿が見える。主役にはならなくとも煮る焼く蒸す、そして薬味にも欠かせない葱は万能である。

葱屑の水におくれず流れ去る

中村汀女

白葱のひかりの棒をいま刻む 黒田杏子
葱だけを見てとんとんと葱刻む 岩田由美
幸不幸葱をみぢんにして忘る 殿村菟絲子
台所の流しの水の音、研ぎ終えた庖丁の小気味好い切れ味が軽やかな音を奏でる。幸不幸を思うは一瞬のこと。

葱焼いて世にも人にも飽きずをり 岡本 眸
ぶつ切りの葱をほどよく焦がしけり 谷口摩耶
風邪をひいたら焼き葱を喉に巻くという民間療法があるように、疲労回復解熱咳痰を鎮める等多用の葱。動じない潔さに惹かれる。

憎むことほとほと疲れ根深汁 木田千女
朝市の地べたで包む葱かぶら 佐野久乃
愛憎相半ばするときも熱い葱汁が気持を弛めてくれる。売手買手、朝市から戻った後には葱汁で身も心もほっこりと温めたい。

油断してをれば葱ち葱坊主 柿本多映
先生の名を言うてみよ葱坊主 大石悦子
見抜かれし嘘にたじろぐ葱坊主 田中洋子
葱坊主はその名称により擬人化を味わい深くする春の季語。大らかな対話が生まれる。
一年を通じて欠かすことのない葱。献立に手を替え品を替え台所に立つ毎日、ふと老いた母に若かりし頃を重ねて記憶の糸を引いてみると、葱を刻む母の限りなくやさしい後ろ姿があった。

磐梯の日は葱畑に伸びてくる

増成粟人
西條弘子

掲句は平成二十一年上梓の主幸の句集『逍遙』の夢十夜の章の作品です。

平成十八年に「鴻」を創刊、同時期に最大の理解者である奥様を亡くされ、内は元より対外的な事柄を一手に抱え東奔西走されていた頃の作品と思われる。

山形、宮城、福島へと句会や吟行会にもよく来ていただきました。その様な旅の途中に磐梯山を見られていたのでしょうか。

山を越えたやわらかな冬の陽射しが、裾野に広がる葱畑にくまなく振りそそぐ様子が見て取れます。

「人には見せなかつた煩悶の時期であり逍遙の時期でもあつた。妻の喪の明けぬうちから各地への旅が続いた」と振り返っておられますが、東の間も忘れることのない奥様への深い愛情が冬の日の暖かさとなつて包み込まれる様です。

霜しかき深谷の葱のとゞさけり

久保田万太郎
田辺満穂

今や一年中目にする葱。葱に季節を感じる事は薄くなつてしまつたが、それでも青物売場の店頭で泥付きの太々とした下仁由葱や深谷葱の束がどっさり積まれ並ぶ頃になると、ああ、今年も冬がやって来たなと実感する。

葱にも関西の九条葱のように緑の部分を食べる葉葱。白い部分を食べる根深葱と地方によつて分かれている様であるが、やはり季語として葱を詠うにはいわけゆる根深。煮てよし焼いてよしの白くて太くて甘い下仁田や深谷の葱といえよう。

葱を一文字とも言い表わすように掲句は一念にまつすぐに明快に詠われている。

霜を浴びる度に甘くなる葱。その葱が届いたのだ。ただそれだけのなんでも無い不期着の、しかしその中に余情を残して。いかにも万太郎らしい作品。届いた葱のその後が想像されて楽しい。

その時の妻に葱の香雪降り

鈴木鷹夫
小澤 元

葱という食材は、日本食の主役とはなり得ないものの、脇役とは言え四季を通じて欠かせない存在なのである。夏はそばの薬味に、又焼鳥には葱間として欠かすことが出来ない。

特に冬のすき焼、寄鍋、湯豆腐などの鍋物には絶対に欠かせぬ存在なのである。

「葱」——特集

葱の一句

「葱」を詠んだ自分の俳句、または「葱」が詠まれた愛誦の句と、その句についてのエピソードや、俳句のなかでの「葱」について語っていただきました。

ところで、掲句「その時の妻に葱の香〜」のその時とはどのような時であったのか。思わせぶりの詠いようで諧味もあり興味の湧く面白い一句である。雪の降るような寒い日なのであるから、まず鍋物の材料としての葱が思い浮かぶ。節子夫人のことであろうから、御主人のために採りたての新鮮な泥付の香り良い葱を買ひ求めてきたに違いない。仕度をする妻の立ち居振る舞いには常に葱の香を漂わせていたのであろう。寒い雪の降る夜ながら、夫妻は香り良い葱の入った鍋物を前に水入らずの楽しい一刻を過ごし得たのであろう。葱の存在は、幸せな生活を送る上に誠に貴重な存在なのである。

死にたしと言ひたりし手が葱刻む

加藤楸邨
花本智美

葱ほど日本人の食生活に欠かせない香味野菜は無い。豆腐に、みそ汁に、うどんや蕎麦に、無いと味が決まらない。葱を刻むことは台所に立つ女性の日常であり、葱の香が残る手指は、主婦の象徴ではないか。

この句の「死にたい」と言ったのは、作者の夫人だろうか。夫に対してこんな言葉をぶつける場面は、とんでもない修羅場か愁嘆場だろう。しかし、死にたいほどの辛く悲しいことがあつても、家族の空腹を満たすために、主婦は台所に立つ。それは身についた習慣であり、主婦の矜持であり、精一杯の強がりかもしれない。

「芹の根も棄てざりし妻は若かりき」という句もあり、夫人はつましく丁寧に暮らした方なのだろう。死にたいと言つた後

で、我に返る冷静さと強さとしたたかさも持ち、こんな人には男は敵わないだろう。返す言葉もなく、葱を刻む後姿を杳然と眺めることしかできない。

男女の隔たり、夫婦の食い違い。葱という生活感のある季語が想像を膨らませる。

献立の決まつてをらさず葱を引く

村手圭子
水谷はや子

長女と次女が大学生の時浦安の駅前生活で生活始めた。近所の八百屋に「愛知産」のダンボールが積まれているのをうれしく思い買物に行くと、店主のお兄さんに問われ「愛知から来ます」と答えると少量の買物にも拘らず値引きをしてくれた」と電話の折に話してくれた。親元を離れてどの様な食生活をしているか心配はしていたが、人様のやさしさに心を和ませていた。時は流れ卒業を機に浦安を離れることになり私は浦安に片付けに行った。部屋の片隅に野菜の屑が有り葱の葉先が見えていた。味噌汁、納豆、冷奴、そしてすき焼きの日もあったのだろつ…。と思いを巡らせた。去ることなりお店の前へ行ったが誰も居られず心の中で感謝し帰りの駅へと向つたことを思い出している。

「献立の決まつてをらさず」と葱の万能と言つイメージを、そして「葱を引く」と言い止めたことにより、葱を配した家庭料理の力強さに引かれ詠い上げたのだろう。忘れることの多き昨今であるが、掲句を念頭に確と置き「Aひまわり農協へと自転車走らせている。

下植木ねぎと伊勢崎銘仙 原 光生

私の住んでいる伊勢崎市には、「下植木ねぎ」という伝統野菜があります。二百年間、一部の地域だけで栽培され、知名度はありませんでしたが、伊勢崎銘仙と深い関係があります。伊勢崎銘仙は、明治から昭和三十年代まで「女性の十人に一人は伊勢崎銘仙をもっていた」といわれるほど流行となり、伊勢崎銘仙を扱う織物業者によって、京都・大阪の

(健康の為に食べますが)、例えばラーメンに山盛りの葱なんて、わあ〜っムリ〜ムリ

さて、葱の思い出という泥葱です。母は買ってきて庭に植えていました。洗わずに新聞紙で包んで立てて保存する方法などをしていいる方が多いと思いますが、庭やプランターがあれば植えてしまつのが効率の良い方法です。

私は介護離職するまで母に洗濯以外は家事一切をしてもらっていたので、母が健在の時

シヨート
エッセイ

葱・アラカルト

問屋筋へのお蔵暮として、この葱が使われ、市場に出ることはまれでした。洋装が一般的となり、着物の衰退とともに下植木ねぎも危機的な状況でしたが、下仁田ねぎや深谷ねぎにはない甘みと柔らかさは鍋物に最適で、最近では「権太夫」とブランド商品化して、売

に、このような生活の知恵をもっと教わってあげれば良かったと、葱を刻みながら後悔しております。

スープの立役者

藤原明美

北風が変わる季節になると、暖かいスープが恋しくなる。「お母さんのスープあるんですよ」だったら他は何も要らないよ」と急に顔を出す子達は声を揃えて言。

料理は得意ではないが、スープだけは、欠

かさず作っている。たつぶりの山菜類やキノコ類、これからの季節は芋類がほくほくして美味しい。そして欠かせないのが葱である。主役にもしい脇役、端役でも良い仕事をしてくれる。まさに立役者。実は効用の高い優れもの。とろりと喉元にも優しい。いつかこの先嚙下困難な年齢が訪れるときが来る。レパートリーを増やしてみよつかと火加減を見ながら考えている。

白い葱と青い葱

谷口摩耶

東京のど真ん中で生まれ育った私だが、結婚してすぐ、大阪で暮らすことになり、スーパーで白い葱をあまり見かけず、シヨックを受けた。大阪は青い、葉葱の文化だったのだ。しかし、若かった所為かすぐに馴染んでしまった。それは美味しかったから。味噌汁、うどん、蕎麦などに薬味として毎日使う。偶に東京に帰ると、何となく物足りない。色も緑の方が良い。今思えば、白葱は濃口醤油に合う。薄口醤油の食文化では、やはり葉葱である。十年近く関西で暮らした体験は貴重で、自分を豊かにしてくれたと感謝している。今は七十代。夫と二人で千葉の矢切葱のぶつ切りを豪快に焼き、昆布出汁の効いた薄味の料理を作って、毎日の食事を楽しんでいる。



羽音集

増成栗人 選



秋夕焼食パン買いひにゆく途中

豊橋 鈴木容子

無雑作に卓に置きたる秋団扇

影法師追うては歩く秋の朝

桜紅葉はらはら杜の風がくる

敗荷やたそがれどきの池の面

帰り道変へるだけでも秋の旅

蕎麦膳の出汁巻き卵江戸の秋

視野検査終へて家路の鱒雲

アイラインきりりと人れて文化の日

恙なき日なり大きな秋夕焼

新涼やオルゴールの捻子巻いてみる

鱒雲子の握りあるビスケット

秋の空バックハンドで打ち返す

今朝の秋講座案内届きけり

新涼やB定食の焼魚

山裾に揺れて真白き蕎麦の花

ちちろ鳴く夢の中までちちろ鳴く

白菜の赤子のごとき葉を広げ

新米を食むたび思ふ父のこと

高原の風に流るる萩の花

松戸 綾戸五十枝

会津 武藤敏子

栗庵閑話 42

虫丸



<http://www.haisi.com/koh/index.htm>